

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

「みんながきれい」な
教室にしよう

今回は「きれいな教室」をテーマにしました。

1 掃除の時間、机を楽々と運ぶ

高学年の掃除の時間のことです。教室の前方の掃除が終わわり、後ろの掃除にかかります。児童机を前に移動するために持ち上げたたん、「アッ」と声が上がりました。机の中の物がバラバラと床に落ちてきたのです。

Q1

机の中の物を落とさずに運ぶには、どうしたらいいでしょうか。

- ① 二人で児童机を運ぶ。
- ② 4校時終了後に、「ミニ帰りの支度」をする。
- ③ 机を持ち運ばないで、引きずる。

「③」は机の中の物は落ちません。また、滑るように机の移動ができるので、掃除時間の短縮になります。

そのかわり床が傷つきます。体も傷つく(怪我をする)可能性が大了。引きずることが面白くなり、ついスピードをあげて滑らせます。その時、床の溝などに机の脚が入り込むと、急ブレーキがかかります。次の瞬間、体が机と一緒に前のめりになって倒れてしまいます。運が悪ければ、顔を打ったり、歯を折ったりします。施設の維持、安全面を考えれば好ましくないでしょう。

「①」は確かに安全ですが、高学年は一人で机を運べます。一人でできることを二人でやるのは非効率的です。

私は「②」のようにしています。

4校時が終わったら、「引き出し」を机の上に置きます。こうすると机の中が空になります。また、机の奥深くにプリントやワークテストがクシャクシャになっていることがあります。それも出します。4校時までに使った教科書・ノート類、もう使わない物を「引き出し」から机に出したら、軽くなったそれを机の中に戻します。

ランドセルをロッカーに取りに行き、それらを片付けます。「ミニ帰りの支度」の完成です。不要なものがなくなり、机の中はすっきりと整理されます。机が軽くなったので、一人でも楽々と机を運べます。

また、机の中の物が落ちることもなくなります。軽くなった机のおかげで掃除の能率アップを図れます。

2 整然と雑巾をかけてある

掃除が終わわり、雑巾を雑巾掛けにかけます。しかし、かけたはずの雑巾が床に落ちていたり、かかっている一箇所が片寄っていたり、今にも落ちそうになったりしています。

Q2

どうしたらきちんと雑巾をかけることができるでしょうか。

- ① 整頓係を作り、掃除終了後に整頓させる。
- ② 雑巾掛けに名前シールを貼る。
- ③ 早い者順に雑巾をかける。
- ④ 教師の目の前でかけさせる。

「③」は全員が我先にと競って後片付けをするでしょうが、きちんとかけてあるかどうかを振り向いて確認しないので、雑巾が床に落ちたことに気づかないまま、その場を立ち去ることが予想されます。

「④」は確実に雑巾をかけるでしょう。

しかし、子どもは教師の合否だけに関心があり、きちんとかかっているかどうかには目が向きません。子どもが整頓の目安を持たないので、教師が不在の時は、乱雑にかけることが予想されます。

「①」はかなり有効な方法ですが、私は好みません。最大の理由は、子どもが子どもを管理するからです。

宿題チェック係などもそうです。点検は教師の仕事です。子どもの世界に序列を作ってはいけません。

私は「②」にしています。

子どもの氏名が書かれたゴム印をビニールテープに押しします。それを雑巾掛けに貼ります。子どもたちはビニールテープの場所に自分の雑巾をかけ、洗濯バサミで留めます。

毎回、同じ場所にかけていると、条件反射でそこにかけてようになります。靴箱やロッカーもそうですが、自分の名前が書いてあれば他人の場所を使うことはありません。これを習慣といたします。

効果はもう一つあります。それは誰が雑巾をかけていないかを確認できることです。雑巾掛けに名前が書かれたビニールテープが見えるということは、雑巾がかかっているかということです。雑巾をかけていない、持ってきていないということが一目瞭然です。

教師の腕前が試される、学級経営のひとくふう。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

3 「ゴミ」を「感じる」

授業中のことです。

床に落ちているゴミが目に入りました。拾おうと思つて歩を進めると、思わず「アララ」と口が開いてしまいました。子どもたちが、ゴミを上手にまたいで席に着くのです。それはまだいい方でした。なんと、それを踏んづけて席に着く子どももいます。

Q3

どうしたら、「ゴミ」が落ちていない教室になるのでしょうか。

- ① 掃除係を作り、授業が終わるたびに掃き掃除をさせる。
- ② 教師がその都度「ゴミ」と言つて、拾わせる。
- ③ 授業の終わりの挨拶の前に、「クリーン・タイム」を設ける。

「①」は効果的ですが、掃除係の負担が大です。人の尻拭いをするような仕事は小学生の係活動には適しません。係は貢献するものですが、それ以上に創造的なものです。楽しいものです。

「きれいな教室」と喜んで掃除をしているのではなく、「汚いなあ。何でゴミがでるんだよ」とぼやいている姿が目につかびます。「②」も効果的ですが、「指示待ち族」を育てるようなものです。

人は、ゴミをゴミと認識するから拾うのです。そこにあつてはいけないものだと思うから取り除こうとするのです。教師の指示で拾

ているようでは、ゴミに対して鈍感な状態が続きます。

誰かの指示がなければ、ゴミを拾わない人間になります。

私は「③」のようにしています。こうすると、ゴミを拾うという習慣化ができます。

起立した後、机の横に出ます。2歩前に進み、回れ右をして、しゃがみます。こうすると、自分の机・椅子の下、机の脇(通路)にゴミが落ちていないかがわかります。

しかし中には、虫眼鏡で見なければ気づかないようなゴミでも拾う子どもがいます。そこで、次のような指示をします。

「小さなゴミは拾わなくてもいいよ。あつたらおかしいなあと思う大きさのゴミだけを拾ってください」

手にしたゴミはゴミ箱に直行です。

ふだんゴミを拾わない子どもも、皆がゴミ箱に向かう姿を見て、あわててしゃがみ直します。教師が注意をしなくても、友達の間で啓発されます。

全員が自席に戻ったことを確認し、日直が授業の終わりの号令をかけます。教室を出た子どもたちは手を洗つて遊びに出かけます。

ここで大事なことがあります。それは、きれいな状態を認識させることです。自席に戻る子どもたちに、声をかけます。

「ほら、教室や自分の席を見てごらん。ゴミが落ちていないからきれいでしょう。椅子も入れてあり、机もきちんと並んでいるよね。きれいな教室は気持ちがいいね」

「本当だ。きれい」
子どもは言わなければ気づかないものです。

価値は教えなければ感じないものです。

教室をきれいにするポイントは二つです。

ひとつは、みんなが取り組むことです。係を作ると特定の子だけが関わることになりません。結果としてきれいになるのですが、みんなが関わるかどうかというプロセスが異なります。

もうひとつは習慣化です。子どもたちができるようになるまで教師は言い続けます。そうすることによって行動が習慣を作り、習慣が品性を高めます。

「書は心なり」、書道の先生の言葉です。形は心を表します。整理・整頓されたきれいな教室は、きれいな心を育てます。

